

## 裏切る者のためにも ルカによる福音書 22 : 1 - 23

22:01 さて、過越祭と言われている除酵祭が近づいていた。 22:02 祭司長たちや律法学者たちは、イエスを殺すにはどうしたらよいかと考えていた。彼らは民衆を恐れていたのである。 22:03 しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。 22:04 ユダは祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談をもちかけた。 22:05 彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた。 22:06 ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。 22:07 過越の小羊を屠るべき除酵祭の日が来た。 22:08 イエスはペトロとヨハネとを使いに出そうとして、「行って過越の食事ができるように準備しなさい」と言われた。 22:09 二人が、「どこに用意いたしましょうか」と言うと、 22:10 イエスは言われた。「都に入ると、水がめを運んでいる男に会う。その人が入る家までついて行き、 22:11 家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする部屋はどこか」とあなたに言っています。』 22:12 すると、席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備をしておきなさい。」 22:13 二人が行ってみると、イエスが言われたとおりのだったので、過越の食事を準備した。 22:14 時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。 22:15 イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。 22:16 言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」 22:17 そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから言われた。「これを取り、互いに回して飲みなさい。 22:18 言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」 22:19 それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」 22:20 食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。 22:21 しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。 22:22 人の子は、定められたとおりの去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」 22:23 そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。

イスカリオテのユダは、聖書の中でも最も異色を放つ人物の一人でしょう。キリストを裏切って守備隊に捕えさせ、その後非業の死を遂げたと伝えられており、キリスト教2000年の歴史の中で悪者とみなされ続けた人物です。けれどもユダが、果たしてそのような人物であったのかという議論は古代からあったようで、1970年代に偶然農夫が洞窟の中で発見した、いわゆる「死海文書」中の「ユダ福音書」には、イエスの真理を最もよく理解した人物として描かれています。ほどなくこの文書は封印さ

れる運命にあったわけですが、ユダ悪役説は見直される必要があるのかもしれませんが。今日はルカによる福音書から、本当にユダが伝説の通り悪漢として描いているのかを、改めて学んでみたいと思います。

民衆に守られていたためにイエスを処刑できずにいた祭司や学者、軍人たちにとって、弟子のひとりであるユダが逮捕の手引きを申し出てくれたことは千載一遇のチャンスでした。なぜユダがそのような申し出をしたのか、その事情は書かれていませんが、ルカ福音書は「ユダの中に、サタンが入った」(22:3)と説明しています。実はサタンは、この福音書の最初のところ、イエスの砂漠での修業時代に登場します。サタンはイエスに、自分を崇拝するなら、パン（つまり財力）と権力と超能力を与えようと約束するのですが、イエスはその誘惑をはねのけました。サタンは「あらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。」(4:13)と、意味深長な言葉でこのエピソードは終わっています。このサタンが再び登場します。今度はイエスの愛弟子のひとりに入ったというのです。サタンの時が来たわけです。けれども、この「時が来る」といういい方には、一つの含みがあります。それはつまり、このような人間の弱さと罪も神の計画の中で予知されていたことであつたということです。

すべては神とその独り子キリストの予知と計画の中にあるという考えは、続く過越際の準備の中でも見ることができます。以前、エルサレム入城の際、イエスは自分が乗るための子ロバを弟子たちに準備させたことがありました。その時も弟子たちはイエスが予知した通りの仕方でロバを得ることができたのですが、今回も「水がめを運んでいる男」(22:10)というあり得ない情景——なぜなら水瓶運びは女の仕事だったからです——に出会うというイエスの予知通りに事が進み、野宿暮らしだった一行は祭りを祝う部屋を調達することができました。これが有名な最後の晩餐の場所になります。そして、すべてはキリストであるイエスの計らい通りに事が進んでいます。サタンの介入も、ユダの裏切りも、そしてイエスの十字架刑も、「定められた通り」(22:22)なのです。

さてこの最後の晩餐で、イエスは仰々しくパンを裂きブドウ酒の入った盃を回し飲みさせ、後々後世までイエスを記念する儀式、すなわち聖餐式を行うように命じられたのだということになっています。聖餐式は、イエスの十字架による死が人間の罪を贖う出来事を再現するもので、教会が長きにわたって礼拝の中心においてきた儀式です。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのようにおこないなさい」(22:19)。「この杯は、あなた方のために流される、わたしの血による新しい契約である」(22:20)。ここで重要なのはあの裏切り者のユダが、この聖餐式に与ってい

るということです。他の福音書、つまりマルコによる福音書もマタイによる福音書も、この最後の晩餐の場面を伝えています。ユダがこの原初の聖餐式に与ったかどうかはあいまいになっています。ルカはその点、ユダが預かっていたことを明記しています。これはおそらく意図的にそうしたのだと思われます。ユダの罪もまた、イエスの予知と贖いの恵みの中にあつたのです。

そのことは 22 節の言葉によっていっそう明らかでしょう。「人の子は、定められた通りに去っていく。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ」(22:22)。人類の罪を贖うという神の壮大なご計画のことが延べられます。そしてイエスは、「だが…」と続けられます。この「だが」という語は、前言を撤回する打消しの「だが」、つまり英語の “but” に相当する語ではありません。ここで使われているギリシア語の接続詞は、話題を変えるときに用いられる「プレーン」なのです。日本語では「それにしても」と訳するのがよろしいかもしれません。ギリシア語では「プレーン・ウーアイ…」と続きます。「ウーアイ」は「不幸だ」という意味ですが、これは元来は「ああ！」という嘆きやうめきを表わす感嘆詞です。「ウーアイ」、悲しみ、うめき、嘆きを感じませんか。言語学では音象徴と言うそうです。「レンジでチンする」とか「ワンちゃん」「にゃんこ」などという語です。つまり、「それにしても、うう…／ああ…」という具合です。神の計画ではそうなることになっている。けれどもそこでそのような役割を負わされる者のなんと悲劇的なことかと、イエスはうめくのです。そしてそのうめきは十字架の上にまで持ち越されます。

「同様に、“霊”も弱い私たちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきか知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもってとりなしてくださるからです」(ローマ 8:26)。マルコは「生まれなかった方が、その者のためによかった。」(マルコ 14:21)と続けます。毎日が苦しくて、苦しくて、「お母さん、どうして私を生んだのと」つぶやかざるを得ない人々がどれだけいることでしょうか。イエスはその苦しみを、我が事にされるのです。ここにユダに対する裁きはありません。ユダのためにもイエスは苦しんでおられる。この事実があるのみです。荒野でイエスがサタンに対峙し、財力・権力・超能力を拒絶されたその方向性は、うめくことによって、罪を代わりに担う十字架において完成したのです。